

論文の要約

テーマ：現代における中国華北農村家族の変容

—山東省臨沂市平邑県武台鎮旧水溝村を事例に—

神奈川大学歴史民俗資料学研究科博士後期課程 王新艷

新中国誕生（1949年10月1日）から現在までの65年間は、中国経済の経済構造が激動の時代に入り、特に、1978年末に鄧小平の指導で中国の改革開放の時代になると、中国社会の各方面に大きな影響をもたらし、社会構造の歴史的な変化を遂げてきている。本研究では、改革開放以降、農村における国の政策及び社会現象を背景にして論を展開した。いわゆる「一人っ子」政策、出稼ぎブーム、土地産権の変革及び「新農村建設」（村改社区）の4点を各章の研究背景として、中国華北農村家族の変容を、山東省臨沂市平邑県武台鎮旧水溝村を対象に明らかにした。

現在まで、現代における中国華北農村及び農村家族の先行研究は膨大な量があり、華北農村家族が解体と再編に直面していると指摘される研究もあった（首藤ほか 2008：255～351）。だが、民俗学の視点から、1980年代～2010年代にわたって時間を軸にし、一つの論文の中で国家の政策と基層農村社会の対応を系統的に整理し、さらに農村家族の各側面においての変容を考察する論文はなかった。しかし、上述4点の国家政策と社会現象を整理すると、華北農村家族の変容と緊密な関係を持つことが分かる。「一人っ子」政策による家族の規模及び構成が変わり、出稼ぎによる家計収入源が農業から兼業に変わり、新しい土地産権制度の変革は農民が土地に対する支配権に影響を与え、「村改社区」による家屋の構造が変化したということが分かる。家族構成、家計収入源、家産範囲、家屋においての変化は何であるのか、どのように変わっているのか、伝統的な農村家族にどこまで影響しているのか、本研究が解決したい問題である。

研究方法としては、民俗学的な聞き取り調査を主にして、今まで華北農村調査史で一新する村——山東省臨沂市旧水溝村を選び、各家族を調査対象にして現地調査を6回実施した。他には、社会学的なアンケート調査、データ統計の方法を結び合わせながら、事例と文献資料を収集・分析した。これらの方法を利用して、旧水溝村家族の変容から華北農村「現代家族」の性格をある程度ではあるが、捉えることを目的とする。

本論では、前述の4点政策や社会現象により、時間を軸に、旧水溝村を事例として、1980年代～2010年代、即ち改革開放政策の実施以降から現在までの、中国国家の政策により華北農村家族の変容を4章に分けて論を展開した。

第1章では、まず国の「一人っ子」政策を四段階に分けてまとめ、各段階での旧水溝村の対応を紹介した（第1節）。次に、佐々木衛の家戸、家戸群、祖先祭祀群の概念を援用し、旧水溝村において「一人っ子」政策により家族実態、家産分配、祖先祭祀の変容と関わる

事例を分析した（第2、3、4節）。さらに、家戸、家戸群、祖先祭祀群という三つレベルの家族構成の変容を明らかにした。即ち：①家戸レベルで「四・二・一」の直系家族成員構成が一般的な家族構成になり、独女・双女世帯が増えている。②家戸群レベルで、家産分配の際、「兄弟均等」の原則が存在の前提条件が無くなり、均等乃至分家する必要がなくなった。分家後、親家戸と息子家戸の間に、「分居分財分食」から「分居同財同食」に変わり、さらに、親家戸と娘家戸を合併する状況も出現した。③祖先祭祀を執行主体が三代から個人・兄弟に変化し、女性も「祖先祭祀群」の範囲に入るのが可能になった。

第2章では、旧水溝村の出稼ぎ実態を述べた（第1節）上で、6つの家族のライルスタイルを事例にして住居形態及び家産分配の変容を考察した（第2節）。住居形態の変容としては単身出稼ぎ、夫婦共にし出稼ぎ、挙家離村の三つの場合により、親家族と子家族がそれぞれ「若夫婦が分居」・「両親+嫁+孫」、「祖父母+孫」、「両親のみ」の住居状態になった。また、出稼ぎによる住居形態の変容が伝統的な家産分配にも影響を与える。かつて家産分配上の①「厳密性」と②均等性が出稼ぎにより①曖昧な状態、②不均分になると変化が生じたという結論を出した。

第3章ではまず、新中国成立以来の中央の土地変革を四段階に分け、旧水溝村の変動及び対応を紹介したうえで、土地の農民家産における位置づけの変容を考察した（第1節）。次に村の分家事例を分析ながら、分家の時期の変容と家族形態の変容の関係を明らかにした（第2節）。現在、新しい土地産権変革のより、また出稼ぎ現象や「一人っ子」政策との共同作用の下で、親家族と既婚する息子家族の間に、「分居同財」の家族形態が出現したことを明確した。

第4章では、国の「村改社区」政策を背景にし、旧水溝村の社区建設（第1節）により、旧水溝村の「部屋+院子（庭）」の二重構造が「部屋のみ」の単一構造へ変化した。「院子」の消失により、①年中行事の様々な面が変わり、人と神の関係のバランスが崩れるようになった。②新しい人間関係の発生場所が「院子」から公共的な施設や組織に変わりつつある。伝統的な村の人間関係圏を支える血縁関係、地縁関係が薄れ、社区施設の建設推進により、グループ関係が次第に形成され、新しい人間関係が確立しつつあると考えられる。

以上の変容をまとめ、改革開放政策の実施以降、中国は経済だけでなく文化や思想など社会各方面でも世界各国との広範な交流や協同を経験してきた。中国の家族も海外の家族と同じような影響や衝撃を受けている。けれども、中国では、都市戸籍と農村戸籍という「二重戸籍」の独特な戸籍制度が存在しているため、中国の都市と農村は、家族を取り巻く社会関係や政策、制度に関して根本的な差異が存在し、中国農村家族の変容に関しては、独特な性格を持っている。また、中国の伝統文化の根は深く強固であり、瞬間に変わったり消滅したりすることはありません、複雑な様相を呈している。現代中国の経済・政策の激変などへの対応のなか、家族の在り方が「解体」していく姿と「再編」していく姿が現れていると思う。

結論の部分で、家人・家産・家屋という三つの側面から農村家族の「解体」と「再編」

を明らかにした。特に、「再編」していく過程では、中国の独自の特徴を現れている。

まず、家族構成の再編を見てみると、「一人っ子」政策で、「多子」の家族が解体した。代わりに①父・母・長男②父・母・長女③父・母・長女・長男④父・母・長女・次女の家族構成モデルが形成してきた。1980年代以降、祖父母を含めると「四・二・一（二）」の直系家族形態が中国家族構成の主体になる。

この新しい家族構成形態のなかで、必然的に二つの結果が現れた。一つ目は男子がいない家族が増加したこと、二つ目は「独男」家族も増えていることである。男子がいない家族にとって、かつて家産分配する時「娘不分与」、祖先祭祀主体が必ず男性であるというルールが解体し、娘が「一家子」としての位置づけに変化している。娘が老親扶養義務を負い、親の遺産を相続できるようになることが見えてきた。更に、既婚の娘が実家の親を迎えに来て同居する事例も珍しくなくなった。家戸群レベルの家族構成が親家族と息子家族だけでなく、「親+娘+婿+孫」のような親家族と娘家族が合併する状況も出現した。

また、既婚娘が実家に戻って墓参りに行くことができるようになった。さらに、親の墓を夫家の村に移動して、夫と一緒に祖先として祭祀することも可能になった。この時、祖先祭祀主体群レベルの家族構成が娘も含むようになった。

二つ目は、親家族と子家族の生活実態の再編について分析すると、新しい家族形態がいくつか形成された。①「独女」の場合、「親+娘+婿+孫」のような娘家族と親家族が同居する家族形態が出てきた。②「独男」の場合、「分家」する必要がなくなり、「両親+息子+嫁+孫」の親家族と息子家族が「同居同財同労同食」の形態になった。③「独男」の場合、名義で「分家」する事例もある。親家族と息子家族が「分家」したが、農作業、養殖業など協同にやり、親家族と息子家族が「分居同財同労同食」の形態になった。④息子家族と名義上「分家」しても、息子家族が出稼ぎで挙家離村のため、村において、高齢者夫婦のみが留守番をする世帯になった。加えて、娘がいないまたは娘家族と一緒に生活できない場合も多い。結局、村に「両親のみ独居」（中国語で「空巢老人」という）の家族形態になった。⑤挙家離村ではなく、単身出稼ぎ、夫婦共に出稼ぎのほうがより多い。単身出稼ぎの場合、親家族と息子家族が「若夫婦分居」・「両親+嫁+孫」が「同居分財同労同食」または「分居分財同労同食」の住居形態になる。若夫婦が共に出稼ぎに行く場合、村において「祖父母+孫」が「隔代家族」の形で同居し、息子家族の村での土地が両親により管理され、親家族と息子夫婦が「分居同財同労分食」する形態になった。

三つ目は、家屋に基づく村の人間関係の再編を分析すると、家屋構造の村の人間関係での重要な位置付けが分かる。農村家屋の構造で、「院子」が半開放な性格を持ち、生活空間と生産空間を兼ねる存在である。しかも、「院子」は個人と個人、さらに家と家の交流する紐帯でもあり、資源共有の仲介場でもあり、人間関係の潤滑油でもある。「院子」が存在することで、伝統的な村の人間関係は血縁関係を超え、個人のみならず家・村の範囲で安定的な地縁関係が形成できた。「村改社区」後、「院子+部屋」の二重住居構造と違い、「部屋のみ」の単一住居構造は極端に言うと閉鎖的な空間になった。家内において、人との出会

いが希薄になり、隣人と接する機会も減少してきた。村住民の交流の場が仕事内容や趣味に基づく公共的な施設や組織に変わり、新しい人間関係——グループ関係が発生するようになった。話題も私的な家庭事情から公的な共通話題に変わった。家屋構造の変化が村の社会関係における機能を弱体化したといえる。

さらに工業化時代の欧米社会の家族について、落合恵美子が提出した「近代家族」の概念を対照しながら、華北農村における「現代家族」が①厳密な父系血縁の代わりに父一娘一孫のような双系血縁の方を強調する②協力関係が強くなる③家内領域と公共領域が分離したという性格を持つことが本研究から導き出した結論である。